

広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
 (第45号 2017.3)

幼小中一貫校における通教科的能力を位置づけた国語科の 学習開発Ⅱ

—社会生活で生きてはたらし、自ら課題を探求・解決できるような
 国語の能力を備えた子ども—

瀧山 真悟 君岡 智央 広兼 睦 杉川 千草
 西木 英里 石川 嘉一 山元 隆春 田中 宏幸
 佐々木 勇 小西いずみ

1. はじめに

去る平成28年12月21日に、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申が松野博一文部科学大臣に手渡された。これを受け、幼稚園、小学校、中学校の新たな学習指導要領等は今年度中、高等学校については来年度中に改訂が行われ、周知等の期間を経て、幼稚園が平成30年度から、小学校が平成32年度から、中学校が平成33年度から、高等学校が平成34年度からそれぞれ実施される予定となっている。

答申の言葉¹⁾を借りると、「知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている」近年、「これからの学校教育においては、「生きる力」の現代的な意義を踏まえてより具体化し、教育課程を通じて確実に育むことが求められて」おり、『『何を知っているか』にとどまりがちであり、知っていることを活用して『何ができるようになるか』にまで発展していない』現状を打破しなければならない。

これを受けて、教科においては、「これからの時代に求められる資質・能力」を見据えて、「何を教えるかという内容は重要ではあるが、前述のとおり、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて『何ができるようになるか』を意識した指導」が求められる。また、資質・能

力の育成にあたっては、「各学校が、縦〔幼小・小中などの学校段階〕と横〔教科等間〕のつながりを意識しながら、その特色に応じた教育課程を編成していくことができるようにすること（〔 〕内筆者注）」が重要だと述べられている。

本学校園では、新領域「希望（のぞみ）」を設置し、その中で育成すべき資質・能力として、キャリアプランニング能力（なりたい自分になる力）、人間関係形成・社会形成能力（関係を構築する力）、課題対応能力（達成へ向かう力）の3つを設定し、研究を進めている。昨年度からは、これらを全教育活動で育成すべき「通教科的能力」として位置付け、保育・教科においても、保育・教科の本質に根ざした資質・能力との関連を明らかにして育成することを目指している。また、本校国語科では、教科の本質を「思考・認識・伝達・創造の基盤を成す国語力」の育成と捉えている。そして、「通教科的能力と関連的に育む国語科の本質に根ざした資質・能力」として、キャリアプランニング能力を「国語を尊重し、言語生活の向上を志す態度」、人間関係形成・社会形成能力を、「コミュニケーション能力の基盤を成す国語の運用能力」、課題対応能力を「論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力」と整理している²⁾。幼小中一貫校という特色を生かし、縦のつながりを強く意識した資質・能力の育成の在り方を追究していきたい。

Shingo Fuchiyama, Tomochika Kimioka, Mutsumi Hirokane, Chigusa Sugikawa, Eri Nishiki, Yoshikazu Ishikawa, Takaharu Yamamoto, Hiroyuki Tanaka, Isamu Sasaki, and Izumi Konishi: Developing Trans-Curriculum Learning of Japanese Language Arts in a K-9 integrated school II

2. 研究の目的・方法

本研究は、昨年度に引き続き、幼小中一貫校としての特色を生かして、通教科的能力を位置づけた国語科の学習開発を行うことによって、新領域「希望(のぞみ)」との関連を明らかにすることを目的としている。

本年度は、幼小中各学校段階において、「物語で作者が伝えたいこと」をどのように捉えているのかを比較・検討することによって、幼小中12年間を見通した通教科的能力の育成につなげていく。

3. 実践1－1年「おはなしをたのしくよみましょう」 （「おおきなかぶ」西郷竹彦訳

－光村図書1年下）

（1）授業の構想

①単元について

「おおきなかぶ」は、無駄な説明がすべてそぎ落とされた上に、繰り返し技法の中で話が展開されるため内容が捉えやすい。保育者の読み聞かせの言葉（音声言語）から、文字言語を手掛かりとする読みへと転換する1年生のこの時期に適している。

授業を構想するにあたり、年長児と中学3年生に同じ題材を読み聞かせた。

幼稚園年長児（32名）に読み聞かせて感想を聞くと

- ・絵がおもしろかった。（5名）
- ・みんなが力を合わせてよかった。（3名）
- ・ねずみの力では抜けないと思ったけど抜けた。（1名）
- ・動物が人を引っ張っていておもしろかった。（1名）

という声があがった。



図1 大型絵本³⁾を用いて読み聞かせを行っている様子

また中学3年生（38名）に読み聞かせ、作者が伝えたいことについて書き出させると

- ・協力，団結（22名）

- ・人間と動物の共生（6名）
- ・ねずみの存在の大切さ（4名）
- ・助け合い（2名）
- ・あきらめない（1名）
- ・食べ物大切さ（1名）
- ・想像する楽しさ（1名）
- ・人間の醜さ（1名）

※「想像する楽しさ」の想像の対象は、土の下にあるかぶの大きさや色，味に対するもの。

※「人間の醜さ」とは、一人ずつ仲間を呼んだことを、かぶが抜けたときにできるだけ分け合わずに済むようにしていると捉えたことから。

というものをあげた。

年長児は多くの子どもが絵本の絵に着目し、中学生になると、作者の伝えたいこととして「協力」だけにとどまらず「共生」「ねずみの存在の大切さ」などを挙げ、作品を多角的に捉えられるようになってきていることが分かる。

②指導にあたって

複数の年長児が気付くことができる「協力」という主題を読み取らせることだけで学習を終わらせてしまえば、学習の意義が小さい。そこで、中学生が挙げた作者の伝えたいことの中で、子どもたちの実態にあったものを選び、それにせまる学習を展開することで、子どもたちの読みの力を伸ばしていこうと考えた。

そこで今回は、小学校生活に慣れてきて人間関係が固定化しつつある子どもたちに、作者が伝えたいことの1つとして考えられる「小さな存在が大きなことを成し遂げる」を読み取らせることとした。これは、年長児1名、中学3年生が4名挙げていたものとかかわりがあるものである。指導に使う教材として、内田莉沙子訳の「おおきなかぶ」ではなく、「小さな存在が大きなことを成し遂げる」という読みの解釈にせまりやすいと考えた西郷竹彦訳の「おおきなかぶ」（引っ張る順番の説明が、かぶを始点としている）を用いることとした。

第1次では「おおきなかぶ」の大体の内容を捉えるために、場面の比較からおじいさんがもった大きなかぶの大きさのイメージの変化を読み取らせる活動を行う。その後、「小さな存在が大きなことを成し遂げる」ことを捉えさせるために、第2・3次において登場人物の登場の順番に着目させる。まず第2次において作者の異なる3つの「おおきなかぶ」を読み比べ、共通

点と相違点を出し合いお話作りにつなげる。今回は、いもとようこ文絵⁴⁾と中井貴恵訳⁵⁾の「おおきなかぶ」を用いた。第3次では、作成したお話と西郷竹彦訳の「おおきなかぶ」とを比べることで、「小さな存在が大きなことを成し遂げる」という読みの解釈にせまる学習を展開する。

ただし、お話を楽しく読むというこの単元の最大のねらいから逸脱しないようにするために、「小さな存在が大きなことを成し遂げる」という1つの読みの解釈を押しつけるのではなく、あくまでも最後は自分の読みの解釈を大切にさせることとした。

③単元の目標

「おおきなかぶ」を参考にしてお話をつくる活動を通して、小さな存在が大きなことを成し遂げることに気付き、楽しみながら読み進めることができるようにする。

④学習計画（全8時間）

第1次	くりかえしのひみつ	……	2時間
第2次	おはなしづくり	……	5時間
第3次	じゅんばんのひみつ	……	1時間

（2）授業の実際

ここでは、第2次・3次について記述する。

①第2次

第2次では、子どもたちが登場人物の登場の順番に着目することをねらった。そのために自分たちでお話づくりをさせ、必然的に登場人物の登場させる順番を考える経験を積ませることができるようにした。

まず子どもたちは、お話づくりに向けて3つの「おおきなかぶ」を読み比べ、お話の共通点・相違点を見つけた。その後、それらを参考にして、自分たちで「おおきな〇〇」というお話をつくった。

以下は、3つの「おおきなかぶ」を読み比べた際に、子どもたちから出た気づきである。

（共通点）
「なかなかぬけない」→「大きいもの」
「かぶは土の中」→「ぬくものが見えてはいけない」
（相違点）
「登場するもの・数」
「掛け声」

共通点を変えてはいけないもの、相違点を変

えていいものとして、自分たちのお話づくりの参考としていた。お話づくりは、グループで行い、グループ分けは、子どもたちが考えた登場人物によって、重なりがないようにすること、できるだけ引っ張る力の強さに違いが出ることを基準に、教師が行った。

（グループ分けの例）

グループ1
仮面ライダー・プリキュア・先生・うさぎ・カブトガニ
グループ2
仮面ライダー・ライオン・ヒョウ・ふなっしー・四つ葉のクローバー

お話づくりは、お話の型を示し、穴埋め形式で行った。

（子どもたちがつくったお話の例）

「おおきなだいこん」
くまモンが、だいこんのたねをまきました。
「あまいあまいだいこんになれ。おおきなおおきなだいこんになれ。」
あまいあまい、おおきなおおきなだいこんになりました。
くまモンは、だいこんをぬこうとしました。
「よいしょ。よいしょ。」
けれども、だいこんはぬけません。
くまモンは、あさがおをよんできました。
だいこんをくまモンがひっぱって、くまモンをあさがおがひっぱって
「よいしょ。よいしょ。」
それでも、だいこんはぬけません。
：

②第3次

【抽出児童を中心に】

○第3次の授業前半において、A児は、登場人物はみんなひっぱってかぶを抜くのだから、どの順番で登場しようかと関係



図2 A児の登場人物の順番

係ないと捉えていた(発言より)。しかし、授

業後半の自分がつくったお話「おおきなだいこん」の順番は、はじめ登場人物の順番に意味をもたせておらずばらばらであったものから、力の強い順に並べ替えていた。その理由を問うと、「ごくうがさいごにきてぬけるのはあたりまえだけど、ごくうたちがひっばってぬけなかつただいこんをあさがおがきてぬいたらおもしろいから。」と答えた。

○A児と同じグループのB児は、「おおきなかぶ」が力の強い順に並んでいることを学習した後も、「おおきなだいこん」の登場人物の順番を力の強い順に並び替えず、初めに出てくる登場人物を「くまモン」のままにしていた。その理由として、「くまモンがたねをまいているすがたがかわいいとおもうから。」と答えた。「小さな存在が大きなことを成し遂げる」という読みの解釈とは異なるが、自分の思う登場人物の順番がもたらす効果を考えて楽しんで学習を進めていた。

【全体】

表1 授業前後の読みの獲得について

	授業前	授業後	差
①小さな存在が大きなことを成し遂げるとい読みの解釈を見出している。	4%	56%	+52
②登場人物の順序について根拠を持ったおもしろさを見出している。	33%	78%	+45

②のおもしろさには、かぶを引っ張る前後の登場人物の関係(犬と猫など)が生み出すおもしろさ、登場人物のキャラクターが生み出すおもしろさ(くまモンが種をまくなど)が含まれている(表1)。

大きく数値は上昇したが、学習した内容が全体のものにはならなかった。「小さな存在が大きなことを成し遂げる」という読みの解釈の獲得を、第3次を中心に行うのではなく、単元全体を通して行う必要があった。

(3) 学習を振り返って

年長児の反応や、中学3年生の読みの解釈を活用して授業づくりを行うことで、できる限りねらいにせまることができる授業づくりを行い、子どもたちのさらなる力の伸びを引き出すことができたと考える。

4. 実践2-4年「表現のくふうを見つけよう」
 (「世界でいちばんやかましい音」)

ベンジャミン＝エルキン作 松岡享子訳
 -学校図書4年下)

(1) 授業の構想

①単元について

ガヤガヤの都に住むギャオギャオ王子は、誕生日のお祝いに「世界でいちばんやかましい音」を聞くはずだったのに、人々の率直な願いが世界中に広まったおかげで、生まれて初めて自然の音に耳を傾け、静けさと落ち着きのすばらしさに気付かされる。物語は起承転結で構成され、題名や登場人物の設定、繰り返し使われる言葉などがテンポのよい展開につながり、読者を引き付け最後まで一気に読ませる。さらに、題名とは正反対の結末は、読者に物語の意味について改めて考えさせるものになっている。

②指導にあたって

4年生では、題名読みや物語の後半部分の予想を本文と比較させることによって、一人ひとりの率直な感想を引き出し、読みの課題意識をもたせるようにした。物語の読みにおいては、子どもたちの課題意識にもとづいて、物語全体の構成や展開を意識させながら学習を進めさせた。その中で、題名や登場人物の人物像、繰り返し使われる言葉が、物語のテンポよい展開やどんでん返しのおもしろさにつながる、作者の巧みなしかけに気付かせるようにした。さらに、これまでの学習を振り返り、物語の内容にふさわしいと思う新たな題を考え、友だちと交流することによって、「作者はなぜ『世界でいちばんやかましい音』という題にしたのだろう。」という学習課題について考えていった。その中で、物語の展開のおもしろさにつながる作者の表現の工夫を見つけたり、作者が題名に込めた物語の意味を考えたりすることができるようにした。

③単元の目標

登場人物の心情やその変化を読み取りながら、物語全体の構成を理解し、物語の構成や展開、書き方にかかわる表現の工夫に気付くことができるようにする。

④学習計画(全10時間)

- 第1次 物語の続きを予想しよう …… 2時間
- 第2次 「世界でいちばんやかましい音」を
読もう …… 4時間
- 第3次 物語の意味を考えよう …… 4時間

⑤調査方法

小学校4年生での授業終了後、児童（31名）、中学校1年生（80名）を対象に、「作者が伝えたいこと」「表現の工夫について気付いたこと」の2点について調査した。中学校1年生では、原作の絵本⁶⁾での読み聞かせを行った後、調査した。なお、中学校1年生のうち73名は、小学校4年生の時にこの物語を学習している。

（2）授業の実際

ここでは、第3次について述べる。

①第1時

これまでの学習を振り返り、物語の内容にふさわしい新たな題名を考えさせた。子どもたちが考えた題名は次のとおりである。

ガヤガヤの都について

「世界でいちばんにこだわる都」「世界でいちばん静かな町」「やかましくて静かな町」「ぎゃく転勝利の都!？」 など

ギャオギャオ王子について

「自然の音はすばらしいと気付いた王子様」「やかましい王子から静かな王子へ」 など

たん生日について

「王子様のたん生日」「王子様の静かなたん生日」「生まれて初めてがいっぱいのたん生日」 など

音について

「初めての静けさ」「世界でいちばん美しい音」「生まれて初めて聞いた音」「世界でいちばん美しいプレゼント」 など

おくさんについて

「ありがとうおくさん」 など

それぞれ、物語の鍵となる登場人物や時、場所などをもとに、自分なりに物語の主題をとらえた題名を考えていた。

②第2時

前時に考えた題名と、物語の題名を比較することによって、「作者はなぜ『世界でいちばんやかましい音』という題にしたのだろう。」という学習課題について考えさせた。物語の中では、「世界でいちばんやかましい音」は実現しなかったが、「世界でいちばんやかましい音が聞きたい。」と言った王子の願いが物語を動かしていることに気づき、作者が題名に込めた物語の意味を考えることができた。

「世界でいちばんやかましい音」が出せなくては「世界でいちばんやかましい町」にならないから、この題にしたんだと思います。王子は、世界でいちばんやかましい音を聞けなかったけど、それは失敗ではないということがわかりました。

世界でいちばんやかましい音プロジェクトがなければ、静かで美しい音を王子が聞くこともなかったから、王子の心を動かしたきっかけになったプロジェクトを題名にしたんだと思いました。立て札にも町の変化が表されていることがよくわかりました。実は、みんな王子と同じで、世界でいちばんやかましい音が聞きたくて、おくさんは悪気があって言ったわけではないのです。題名は、作者の工夫と物語の大切な役割がかかわっているということがわかりました。

③第3・4時

これまでの学習を振り返るとともに、「設定」「展開」「山場」「結末」からなる物語の構成を確認した。また、作者が読者の予想を何度も良い意味で裏切っていることが、最後まで読者を引き付けるとともに、繰り返し使われる言葉や擬音語も、物語のおもしろさを生み出していることに気付かせることができた。

「世界でいちばんやかましい音」では、読者に楽しんでもらえるように、どんでん返しを入れていること、設定で主な登場人物のしょうかいをして、展開でプロジェクトをスタートさせて、山場でどんでん返しがあり、結末では、その後の町の様子について書かれているということがわかりました。

私は、この物語がとってもおもしろかったです。作者さんは、題名や物語の中にたくさんの工夫を残していました。本当はこうなるはずなのに、一人のおくさんから予想もしない出来事がどんどん広がっておもしろさにつながっているからです。

その後、それぞれが物語の続き話や、登場人物の日記、作者の後書きなどを書いて学習のまとめとした。

(3) 調査結果

作者が伝えたいことについて、小学校4年生では、次の調査結果が得られた。(複数回答あり)

- ・静けさや落ち着きがよい。(42%)
- ・自然の音のよさを伝えたい。(19%)
- ・最後にはいいことがある。(けがの功名)(10%)
- ・人任せにしない。(6%) など

中学校1年生では、次の調査結果が得られた。(複数回答あり)

- ・自然の音のよさを伝えたい。(28%)
- ・静けさや落ち着きがよい。(26%)
- ・人任せにしてはいけない。(24%)
- ・自分勝手はいけない。(13%)
- ・自分のやるべきことに責任をもつ。(8%)
- ・新しい発見がある。(6%) など

この結果から、小学校4年生では、登場人物の変容や物語の展開から、多くの子どもたちが登場人物に寄り添いながら物語の主題を読み取っていることがわかる。

中学校1年生では、小学校4年生と同様に自然の音や静けさや落ち着きのすばらしさに着目するだけでなく、「人任せにしてはいけない」「自分勝手はいけない」「自分のやるべきことに責任をもつ」のほか、「結果だけを楽しもうとすることはいけない」「自分一人くらいという考えはいけない」など、これまでの生活経験を反映してか、教訓的な捉え方を生徒が多く見られた。さらに、「人間とは自己中心的な生き物だ」「人は流されやすい」など、人間の本質として読み取ったことを書いている生徒もいた。一方、「みんなの力で、だれも想像できないことができる」「新しいことに挑戦することはすばらしい」「未来は変えられる」など、これからの自分の生き方に重ね合わせている様子も伺えた。

また、表現の工夫について、小学校4年生では、次の調査結果が得られた。(複数回答あり)

- ・どんでん返し(19%)
- ・言葉の繰り返し(19%)
- ・音を表す言葉(10%)
- ・変化の様子(6%) など

一方、中学校1年生では、次の調査結果が得られた。(複数回答あり)

- ・音を表す言葉(擬音語・オノマトペ)(30%)
- ・言葉の繰り返し(21%)
- ・変化の様子(6%)
- ・具体物での描写(5%) など

小学校4年生では、授業の中で、物語の構成について学習したこともあり、表現の工夫として「どんでん返し」を取り上げている子どももいた。その理由として、「おもしろい」「すごい」「ドキドキワクワクする」など、読者としての立場から、物語を楽しんでいることがうかがえる。また、変化の様子については、王子や町の変化だけでなく、原作の絵本にある町の立て札の挿絵の違いから読み取っている子どももいた。

中学校1年生では、「言葉の繰り返しがあるので、強調されている」「同じ言葉の反復で印象付けている」「擬音語が多用されているので、やかまさが強調され、物語に入り込みやすくなる」「音の描写が具体的でイメージしやすい」「『やかましい町』から『静かな町』への変化の様子」が、ラストシーンに象徴的に表れている」など、表現の工夫のもたらす効果についても、具体的に記述している生徒が見られた。

(4) 学習を振り返って

「作者が伝えたいこと」「表現の工夫について気付いたこと」の2点についての調査から、小学校4年生では、登場人物に寄り添いながら、物語を読者の立場から楽しもうとする傾向が強いことが伺えた。また、授業の中で、自分で題名を考えさせたり、物語の構成について学ばせたりしたことが、表現の工夫に着目させることにつながったと考える。しかし、表現の工夫を作者が伝えたいことと結びつけて読み取ったり、表現の工夫の意図をまとめたりすることがまだ難しい子どもも見られた。

中学校1年生では、作者の伝えたいことを自分の生活経験や生き方と結びつけて考えたり、登場人物の言動から人間の本質を読み取ったりする点が特徴的であった。また、表現の工夫に着目するだけでなく、その効果を考えながら読む力が育っていることが伺えた。一方で、あまりに分析的に読もうとするあまり、物語そのもの

のを楽しむことができているような様子も見受けられた。

物語そのものを楽しく読むことと分析的な読みとが両立できるよう、これからも、小学校から中学校へつながる読みの学習を積み上げていきたい。

5. 成果と課題

ここでは、二つの実践から、幼小中一貫した通教科的能力の育成のあり方について考察する。

本研究は昨年度に引き続き、幼稚園児および中学生の読みの解釈を踏まえて、小学校1年生と4年生での授業のねらいを設定して実践を試みた。授業のねらいとして「物語で作者が伝えたいこと」を設定し、どうとらえているのかを比較・検討することにより、幼小中の系統性を探ることができた。

1年生では、教師がねらう「物語で作者が伝えたいこと」にせまる読みの学習を展開しながらも、中学生の実態などを加味して、児童が新たな読みの解釈を見出すことも大切にしていた。その結果、学習の最後にはねらった「物語で作者が伝えたいこと」をつかませることとともに、自分の読みの解釈を大切にすることができた。4年生では、表現の工夫に関心をもちながら物語を読む新たな楽しさを体験させるというねらいを設定することができた。その結果、自分で題名を考えたり、物語の構成について学んだりしたことが、物語の表現の工夫に気づききっかけとなった。題名の意味を考えさせたり、物語を予想させたりすることによって、「物語で作者が伝えたいこと」について考えさせることができた。

このように、読みの系統性を踏まえた課題設定を通して上位学年の読みに近づく学習活動により、通教科的能力の育成に資することができたと考える。

今後も、小学校高学年や中学校での実践へと広げ、幼小中12年間を見通した通教科能力の育成につなげていきたい。

6. おわりに

「通教科的能力を位置づけた国語科の学習開発」を進めるにあたって、今年度は「自ら課題を探究・解決できるような国語の能力」の育成をめざすこととした。特に、幼小中の各学校

段階において「物語の読み」がどのように異なるかを確かめることによって、探究課題をどのように設定するかを明らかにしようとした。

具体的には、①「新たな物語の創作」や②「新たな題名の設定」など、「書き手」の立場を経験する課題を与えることによって、原作の意図(作者が伝えたいこと)をいっそう深くとらえさせようとするものである。このような活動を取り入れることによって、「自ら探究する楽しさ」や「物語を読む楽しさ」を実感することができれば、「生涯にわたって読書に親しみ、言語生活の向上を志す態度」が育成されるであろう。

また、「読み手」相互の交流によって、多様な読み方を共有することも重視した。この活動は、「他者とのコミュニケーション能力」の育成に生きるはずである。

さらに、作品分析にあたっては、「登場人物の順番」や「物語の展開」や「表現の工夫」に注目させ、各自の意見を述べさせるようにした。このことによって、「創造的・論理的にものごとを考える能力」が育つはずである。

「物語を読む」学習は国語科独自の領域であるが、この学習を通じて育てられる言語能力は、通教科的能力として生かされることになる。

引用(参考)文献

- 1) 中央教育審議会：「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」，2016，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.
- 2) 広島大学附属三原学校園：「国語科研究構想」，平成28年度広島大学附属三原学校園幼小中一貫教育研究会国語科協議会資料，2016.
- 3) A・トルストイ作 佐藤忠良絵 内田莉沙子訳：大型絵本『おおきなかぶ』，福音館書店，1996.
- 4) いもとようこ文絵：『おおきなかぶ』金の星社，2007.
- 5) トルストイ話 ニーアムシャーキー絵 中井貴恵訳：『おおきなかぶ』ブロンズ新社，1999.
- 6) ベンジャミン＝エルキン作 松岡享子訳：『世界でいちばんやかましい音』こぐま社，1999.

要 約

幼小中一貫校における通教科的能力を位置づけた国語科の学習開発Ⅱ

—社会生活で生きてはたらき，自ら課題を探求・解決できるような国語の能力を備えた子ども—

本研究は，昨年度に引き続き，幼小中一貫校としての特色を生かして，通教科的能力を位置づけた国語科の学習開発を行うことによって，新領域「希望（のぞみ）」との関連を明らかにすることを目的としている。本年度は，幼小中各学校段階において，「物語で作者が伝えたいこと」をどのようにとらえているのかを比較・検討することによって，幼小中12年間を見通した通教科的能力の育成につなげていった。幼稚園年長児・小学校1年生・中学校3年生では「おおきなかぶ」を，小学校4年生と中学校1年生では「世界でいちばんやかましい音」を教材として，その読みを比較・検討した。結果として，読みの系統性を踏まえた課題設定を通して上位学年の読みに近づく学習活動により，通教科的能力の育成に資することができた。

Developing Trans-Curriculum Learning of Japanese Language Arts in a K-9 integrated school II

—For nurturing students with the zest for living and with capabilities to solving their own tasks for themselves—

The purpose of this study is intended to clarify the relationship with “NOZOMI” and our developing literature units for nurturing students’ learning abilities beyond each school subject. In this paper, by examining how students make out “what authors convey through stories” in each grade levels of elementary and secondary classes, the teaching objectives for lessons for nurturing students’ abilities adapting any situations were settled. Based on the outcomes of the lessons about A BIG TURNIP(a Russian folk tale) in the eldest class in kindergarten, Grade1 and Grade9 classes, and THE LOUDEST NOISE IN THE WORLD(by Benjamin Elkin) in Grade4 and Grade7 classes, any features of students’ responses were revealed through comparing and examining reader responses to each texts in each grades. For developing “NOZOMI” related learnings, it would be important to implement learning activities with the task settings following the ladders for reading development so much.